

Nara Women's University

近代日本における避妊言説と家族の情緒化:日本型近代家族の歴史社会学的研究

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2019-03-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮坂,靖子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/5202

(別紙1)

論文の内容の要旨

氏名	宮坂靖子		
論文題目	近代日本における避妊言説と家族の情緒化 ——日本型近代家族の歴史社会学的研究——		
審査委員	区分	職名	氏名
	委員長		印
	委員		印
内容の要旨			
<p>本論文の目的は、「近代家族」のもっとも顕著な特徴である「家族成員間の情緒的紐帯」に焦点をあてて、日本の「家族の情緒化」の規範形成プロセスを明らかにすることである。「家族の情緒化」は「家族に愛情規範が排他的に付与されること」と定義される。「家族の情緒化」を捉える三つの指標（①愛育の対象としての子ども観の成立、②「性－愛－結婚」三位一体観の成立、③「家庭性」の成立）のうち、本研究では、家族社会学における近代家族論がこれまで等閑視してきた②夫婦関係に焦点があてられる。この点を強化することによって、家族の近代化プロセスの全体像を捉えようということである。</p> <p>研究の対象となる時期は、新中間層に「近代家族」規範が形成された大正期から昭和初期（1910年～1920年代）であり、資料とされるのは、産児調節運動にかかわったオピニオン・リーダーの1900年～1930年に刊行された著作等や、新中間層が主な読者層である『主婦之友』（1917年3月刊行）、『婦人公論』（1916年1月刊行）の創刊から1930年までの避妊に関する記事である。家族の近代化プロセスの全体像は避妊言説の分析によって捉えうるというのが、本研究の戦略である。</p> <p>第1章「先行研究の検討とその意義」では、先行研究のレビューを通して、本研究の独自性が、これまで生殖パースペクティブ中心でなされてきた近代家族研究にセクシュアリティパースペクティブによる研究を接合させたこと、ジェンダー非対称性に着目したこと、オピニオン・リーダーのみならず、当該社会で生活する人々の避妊の実践と心性を明かにしたこと、が確認されている。</p> <p>第2章「産児調節運動の展開と避妊の実践」では、1920年代の新中間層において「少産優育」の心性が台頭し、1920年代後半になると、産児調節相談機関の利用者は労働者階級へと拡大し、1930年代前半には避妊は社会的に受容されていたことが明らかにされた。</p> <p>第3章「避妊言説のロジック構成とジェンダー非対称性」では、1903年から1925年頃までのオピニオン・リーダーの「避妊=可」言説のロジックは、A「人口問題系」言説、B「制欲系」言説、C「性愛系」言説、D「女性・人権系」言説の四つに類型化され、男性論者にお</p>			

いては「A→B→C」というおおまかな推移がみられることを発見した。女性論者の「避妊＝可」言説は、Aが出発点であることは男性論者と一致していたものの、その後、B、Cを回避しつつ、Dへと男性論者とは異なる経路で推移した。避妊の実践によりもたらされる夫婦間性行動における「生殖と快楽の分離」は「快楽の享受=不道德」という批判と直結するため、女性論者は、避妊受容に対するリスクを回避するために避妊を生殖や女性の人権にかかわるものとして位置づけるという戦略をとったのである。近代家族の代表的なメルクマールである「性－愛－結婚」三位一体観については、その一方の要素である「貞操・純潔・一夫一婦制」言説は男女双方の「避妊＝可」言説に共通していたが、「セックスにおける夫婦和合」言説は女性論者から意図的に捨象された。「性－愛－結婚」三位一体観の成立や夫婦間性行動の性愛化のプロセスにはジェンダー非対称性がみられたことが指摘されている。

第4章「女性雑誌を通してみる避妊の実践」では、女性雑誌に投稿された読者の体験談を資料として、避妊の理由、避妊情報や避妊方法の入手手段や経路、具体的避妊法を探り、新中間層の人々の避妊の実態を明らかにした。産児調節運動においては、避妊具や薬剤などを用いた人工的避妊法が主に用いられていたのに対して、読者の体験談にあっては、半数程度のケースで月経などに基づいた受胎期の知識を利用した節制・禁欲による避妊法が実践されていたことが指摘されている。

第5章「女性雑誌を通してみる避妊の心性」は、第4章と同様の資料を用い、避妊の実践を通して家族に付与された意味を探ることで、新たな家族規範の生成を解明している。節制・禁欲による避妊法が実践された背景として、男性には新中間層の男性のアイデンティティ形成に必須な要素とされる「克己」が求められ、男らしさの規範として作用したことが指摘されている。また、避妊の体験談を通して、「愛児」「夫婦愛」「家族愛」などのタームに象徴される「しあわせな家族」イメージが発信され、新たな家族規範の生成に影響を及ぼした可能性があることなどが指摘された。

第6章「女性雑誌における夫婦和合言説と親密性」では、夫婦和合言説を資料にして、夫婦の愛情（情緒）の質や夫婦和合言説と避妊言説の関係を考察している。その結果、夫婦の愛情（情緒）については、恋愛結婚とは異なる「友愛結婚」を前提として夫婦愛の形成の重要性が指摘されたこと、しかし、その愛情（情緒）はジェンダー非対称であり、かつ、子どもを媒介とした夫婦愛の形成が要請されていたことが明らかにされた。また、夫婦和合言説では、性的和合が強調される一方で避妊が否定されるというアンビヴァレンスが存在し、避妊の推進にあたり医師（性的和合論者）と非医師（産児調節運動家）との間に分断が存在したことなどが指摘された。

「結論」として指摘されたのは以下の諸論点である。1920年代の日本における避妊の実践は、「性の生殖への従属」と「性における生殖と快楽の分離」の間でせめぎあっていたこと。避妊の肯定・実行は「性における生殖と快楽の分離」と直結していたのではなく、許容されたのは、禁欲・節制による避妊法により、「性の生殖への従属」という前提を維持したまま避妊を導入し「少産優育」を実現することであったこと。1930年前後には「夫婦間性行動の性愛化」への動きは徐々に開始されたが、「性における生殖と快楽の分離」への抵抗感は根強く存在したこと。避妊の実践は「愛児」と「家族愛」「幸せな家族」を実現する関係性としての「家庭性」の創出に第一次的に効果を及ぼし、夫婦間性行動の性愛化への影響については副次的であったこと。日本の近代家族は、依然として夫婦関係軸より親子関係軸を優先していた点で、家制度の延長上に位置づけることができる「日本型」家族であったが、同時に、家族と「愛情（情緒）」を接合した言説を産出し、家族に情緒規範を付与した点において「近代」家族として変容を遂げようとしていたこと。以上が、日本における家族の近代化プロセスとして本研究が明らかにしたことである。

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名	宮坂靖子		
論文題目	近代日本における避妊言説と家族の情緒化 ——日本型近代家族の歴史社会学的研究——		
審査委員	区分	職名	氏名
	委員長		印
	委員		印
要旨			
<p>本研究は、避妊に着目し、避妊の歴史社会学を開拓することによって、日本型近代家族の特徴を明らかにし、家族社会学における近代家族論に新たな貢献をしようとする野心的な試みである。</p> <p>家族社会学における近代家族研究は、これまで主に親子関係や家庭性に着目する生殖パースペクティブ中心に進められてきた。本研究は、夫婦関係に着目するセクシュアリティパースペクティブを付加し、両者を統合することを試みている。この両パースペクティブを接続するための戦略的拠点とされたのが「避妊」である。</p> <p>避妊は、従来、民俗学や歴史学（教育史、女性史、医学史等）、人口学において、出生コントロール方法の歴史として研究されてきた。しかし、避妊がいかに実践されたか、避妊を通して体験された心性がどのようなものであったかなど、人々の避妊実践の経験を具体的に明らかにする試みはほとんどなされてこなかった。本研究は、その空白地を、避妊の歴史社会学を開拓することで埋めようとしている。当時のオピニオン・リーダーの言説実践だけでなく、新中間層の言説実践をも射程におさめ、後者については避妊の営みを実践と心性という二つのレベルからアプローチする。また、ジェンダーの視点も重視し、従来のセクシュアリティ研究や家族社会学研究において一枚岩的に扱われてきた「性－愛－結婚」三位一体観に内包されたジェンダー非対称性を明らかにすることをめざした。</p> <p>避妊の歴史社会学研究は単に避妊研究としてあるのではなく、著者は、避妊という実践を通して近代日本の「家族の情緒化」のプロセスを明らかにしようとする。家族の情緒化プロセスへのアプローチを可能にするため、避妊言説と関連させながら、同時代の夫婦和合言説も視野に入れ、夫婦の愛情（情緒）に付与された意味を通して愛情（情緒）の質を捉えようとしたのである。</p> <p>以上のような目的と戦略とをもつ本研究は、それゆえ、避妊言説の分析を中心とした実証研究である避妊の歴史社会学と、これらの知見に基づいて「家族の情緒化」プロセスを解明する近代家族論、という二領域から構成されている。</p>			

避妊の歴史社会学に関しては、オピニオン・リーダーの避妊肯定のロジックにおいてジェンダー非対称性がみられるが、節制（制欲）を重視する点はジェンダーを問わず論者に共通していたことが指摘された。読者層の体験談からは、禁欲的避妊法が実践される傾向が認められること、その背景には克己という男らしさのジェンダーが存在したことなどが示された。家族の情緒化については、オピニオン・リーダーレベルでは、産児調節運動の避妊言説においても夫婦和合言説においても、夫婦関係と愛情（情緒）を結合させる言説が増殖したことが確認された。新中間層レベルにおいても、避妊の実践が、夫婦間の親密性を築く契機となったこと、家族と「愛児」「夫婦愛」「家族愛」とを接合した「しあわせな家族」のイメージが避妊の体験談を通して発信され、この新たな家族イメージが新中間層の心性へと浸透していったことが裏付けられた。家族の情緒化は、親子関係レベル、家庭性レベルはもちろんのこと、夫婦関係においても推進されたことが実証的に確認できたことは、評価に値しよう。

近代家族論においては、一般に、近代家族のもっとも顕著な特徴のひとつとして、性別役割分業の成立（女性の主婦化）とともに「性－愛－結婚」三位一体観が挙げられるが、このことを、避妊言説の分析から跡づけたことは避妊の歴史社会学研究の貢献と言えるだろう。とはいえ、特筆すべきなのは、本研究が、1920年代において、夫婦間性行動の性愛化を促進する言説実践は遂行されているものの、夫婦間性行動の性愛化は単線的には進行せず、またその言説実践と受容にはジェンダー非対称がみられることを指摘したことである。つまり、1920年代の新中間層においては、夫婦間性行動の性愛化はセクシュアリティ研究における通説ほどには確固とした地位を築いていなかったのである。避妊も夫婦間性行動の性愛化も「節制（制欲）」に基づく「性の生殖への従属」（生殖主義）の範囲内で許容される傾向がみられたのであり、「性における生殖と快楽の分離」は抑制されていた。この点が、欧米型近代家族と日本型近代家族のもっとも大きな差異であることが明らかにされたのである。つまり、近代日本における家族の親密性形成の核は、夫婦中心よりも親子中心（生殖中心）であり、母子関係を夫婦関係へ敷衍した母性主義的な「夫婦愛」「家族愛」を重視する日本的近代特有の家族規範が形成された、という指摘である。

このように本研究は、日本型近代家族の特徴を、節制（制欲）主義、生殖中心主義、子ども中心主義、および、母性主義という四つに求め、近代日本における家族の情緒化のプロセスを解明し、1980年代後半に開始され1990年代に一定のパラダイムに到達した近代家族論の再検討の必要性を指摘した。とりわけ、「性－愛－結婚」三位一体観の成立については、従来の見解を批判的に捉え直すことが必要であることを実証的に示した。この点が、避妊を戦略的拠点として設定した本研究が家族社会学の近代家族論に対してなした大きな貢献と言えよう。

本研究のもとになっているのは、学会誌論文（査読付き）3本、研究紀要（査読なし）5本、書籍等所収の論文3本、その他1本である。なかでも、実証編の中核となる第4章、第5章の萌芽となった論文は、岩波書店刊行の「日本のフェミニズム」シリーズ、その後続の「新編 日本のフェミニズム」シリーズに収録され、高く評価されたものである。

よって、本学位申請論文は、奈良女子大学博士（社会科学）の学位を授与されるに十分な内容を有していると判断した。